

八尾

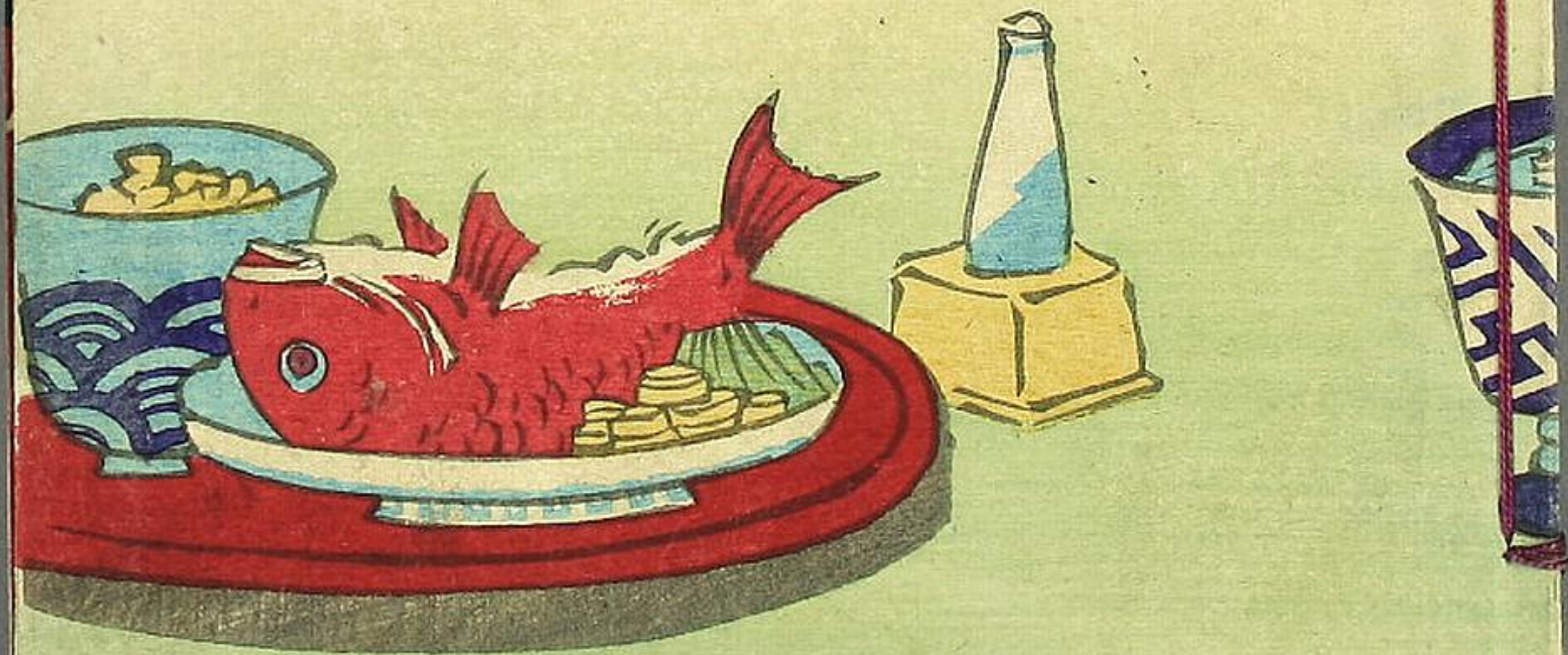


松林伯圓之

布施譚 三編

今常盤

梅堂 國政画





名

松林伯圓編輯

梅堂國政圖畫

三浦上

4479
36

48-8182



講釈師とてさうであらう。五十年前川柳の罵言今開け行く
 世の中へうそをいふ人の信用薄く劇場も狂言綺語を廢し活歴史と題
 号して突事と以て旨とせむる幼童遊ひの錦繪を彼義經の八艘飛も
 西南事件の株を取られ八犬傳より日本外史火鉢までとられて梅屋
 讀む浮氣盛りの姉さんか報知日報曙朝野訓假名の小新聞論説が
 あり杯との御説宣斯く文明進歩と仰てます。悔む不学の我輩
 然れ共一際勉強して成文正史と演説あり或ハ草紙の編輯も実録
 たり心い書綴らば時に近江の布施譚も僥倖するれ賣口能く覺
 束るくも第三編漸々やうて局と結ひぬ

明治十二年のしり杉の歳の
 演説師兼等外作者
 松林伯圓誌





市色三



市色三

第十回 枕田へえより着ふさ

形さむいあゝあゝさねとて折所故
 小ぢやと木引はあああとなま
 に対ひゝゝるゝるあまのあ
 け換りのと始めてついで天
 致るは怒り我れ如何にも
 ちやあゝあゝと又い
 世あ合ぬ徳園の権力
 家亡人非所と中西家
 子あああ
 度不暴備ははらるか
 殺害さす絶縁さす
 二月の十日廿五日帝
 施家發勤の足跡に後
 合せさるゝ人々の籠み

●事も
 多岐からか
 丁後すう四ハ
 まの千本通
 俗用ゆてあ略

上
 夜あ入て
 ゆん五
 條橋本
 の旅
 店

●事
 竹屋
 方へ
 一泊に
 判給と
 考絶我
 姓あや
 死裁

娘あま
 子げあ

布施伊登

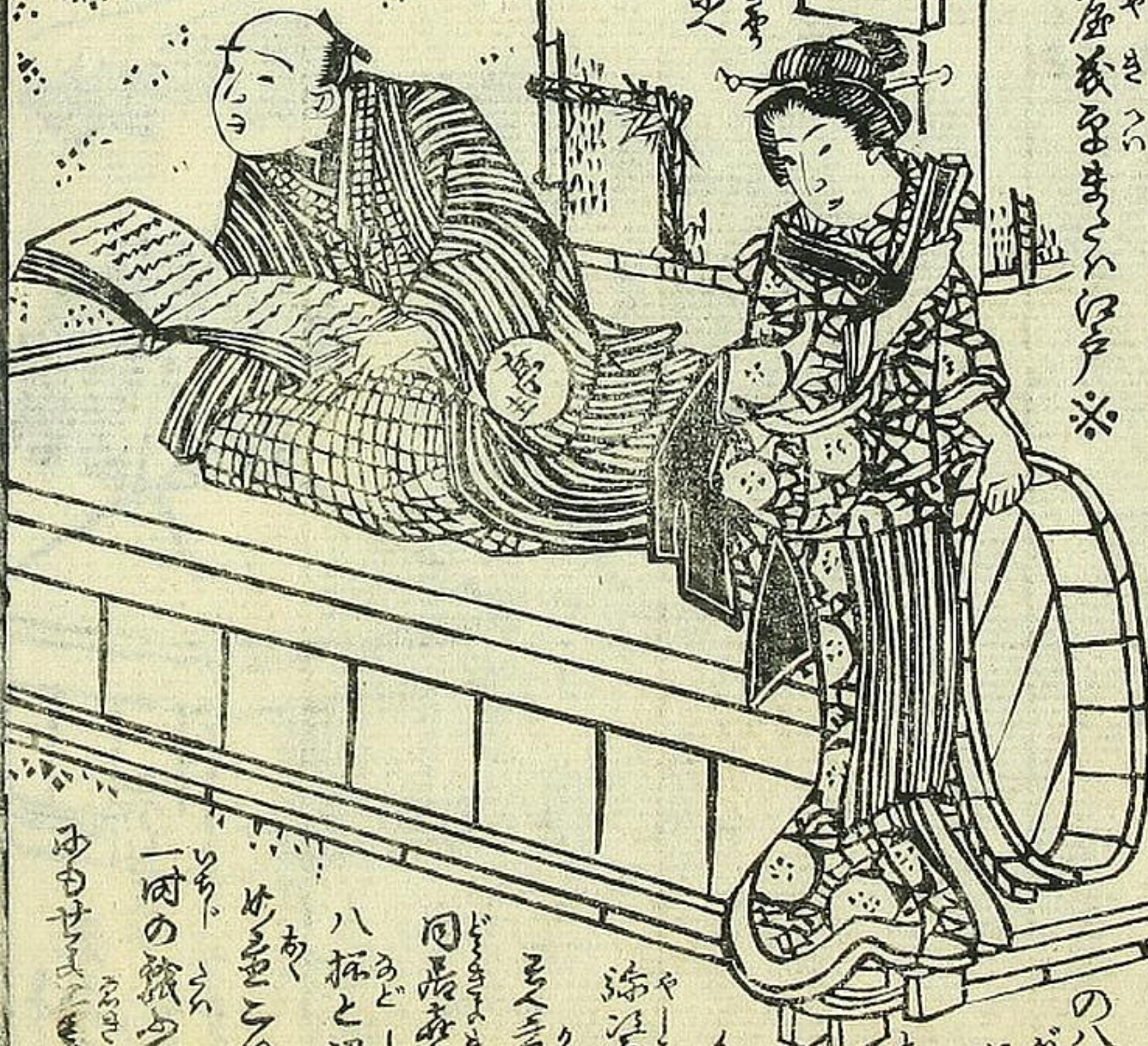
○き 六辨設小似これとも
是等の所へ河原意あつて地考の
寛死時

○甚く書小のての泉竹塚天川
屋敷をまゝの戸

※律の
の八丁
堀

旅人宿 折屋

これより下堂へ
止して修りぬ
此寺長友へ通法一縁友一西西
出張して五條橋東の林屋方
至り十月廿二日夜の宿帳ホセ
桐おみ濃賀練士族桃田
後子と死
あつた尚
化講
一心講
小念小念
と入る人



八振と認
め
一何の被れ
西の世

定宿

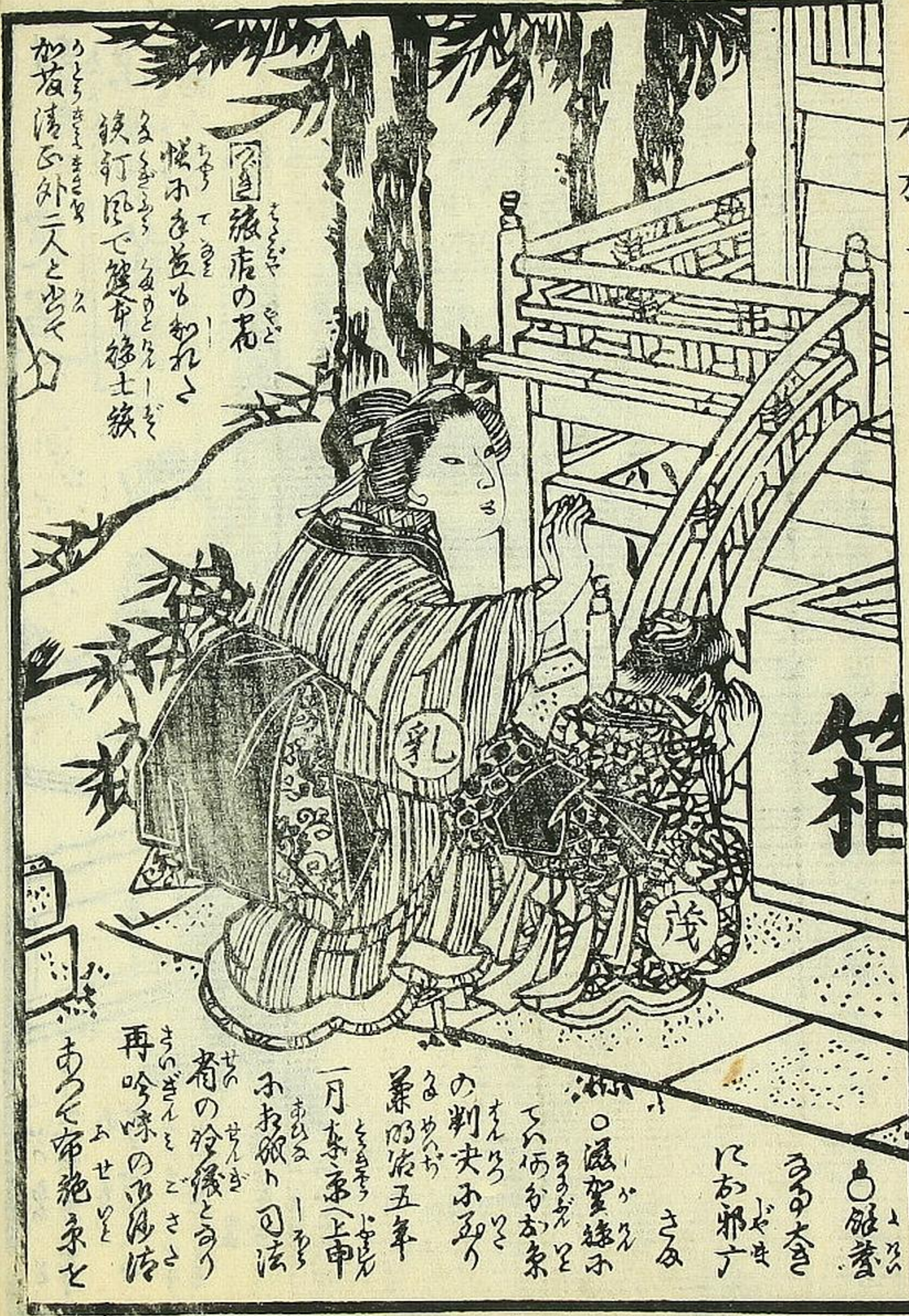
花講



ある希と
子出梶園の
人物ホセ
紀すに兼て
訓諒の客ある
放妻安万
と答つる小梅
友ま由米解
とちる
並み綿へ主母の具
以心と陳り板の令公始光
徳安吏由今更梶園小
家の養と常、名家の花と
附一後馬の板家不為り



○作者伯田徳之忠孝今以梶園氏の物語
附き陳るまは能形意へ徳名中の旅客旅店の
此書へまゝの自己の實名と記載せり
梅の



加茂清正外二人と出づ
 狭行風で徳市様士族
 帳小を並べおれし
 〇滋賀縣小
 〇何をお束
 〇判夫小あり
 兼明治五年
 一月東上申
 小お取り可法
 者の冷後とあり
 再吟味の西海流
 あつて市絶系と

〇滋賀
 〇何をお束
 〇判夫小あり
 兼明治五年
 一月東上申
 小お取り可法
 者の冷後とあり
 再吟味の西海流
 あつて市絶系と



あり好ま
 実あふも
 甘く何となく懐柔
 〇何をお束
 〇判夫小あり
 兼明治五年
 一月東上申
 小お取り可法
 者の冷後とあり
 再吟味の西海流
 あつて市絶系と

〇滋賀
 〇何をお束
 〇判夫小あり
 兼明治五年
 一月東上申
 小お取り可法
 者の冷後とあり
 再吟味の西海流
 あつて市絶系と

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江



腰繩こしづなの
て布ぬい施い糸いと
と引ひ出だけ
連つらやはの
都みやこのあは

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

昔むかし一ひとのこの
山やま様さまのまた

間まのあらわい
又また也なり

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江

○藤原経下近江



物ものをを持もち

二ふた女にようのあは

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

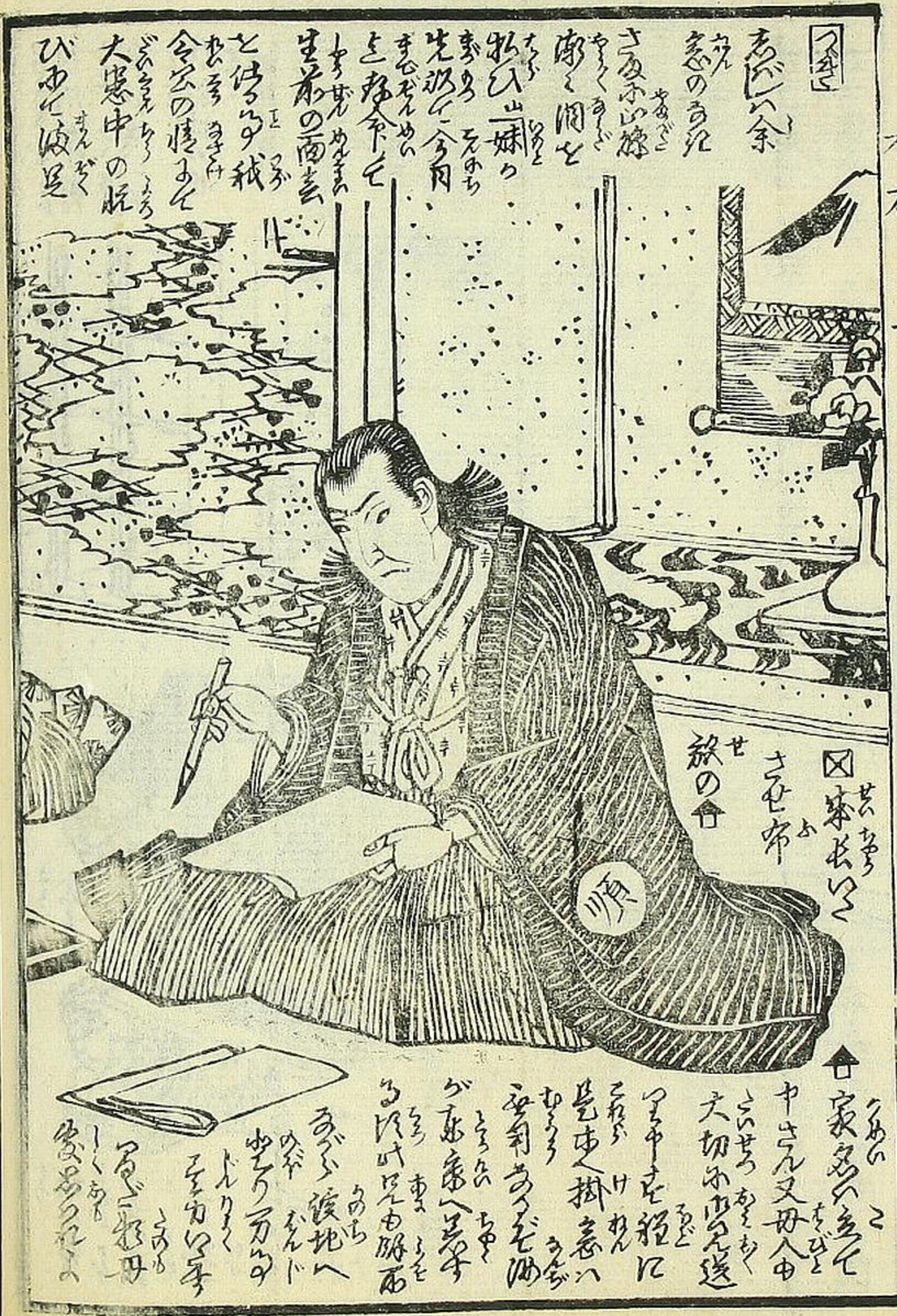
子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ

子このこのこ



あはれ余
志の死
さあふ心緒
胸の洞と
私ひ一妹の
先此の今月
とた命と
生前の面
と供のつれ
今迄の情を
大患中の恨
ひあは海

茶衣の
せむ
敵の合

家名は
中はん又母入申
大切ふり送
中を在程に
是更掛巻ハ
聖朝あを油
か東条へ
多時足由勝而
あは海地へ
ゆり方
そをわの年
る二母
あは海



小落る子
に寄つて何ゆ由
中して得るは
以上は自神々の
東京の法廷へ
出さるは不
事と連て衆人の
成りぬる法石
あて四代者希
と必法はさ
伏し死を
定匠ふあ
初を弄あひ

女の間
有る下
も大
あは海
初
同
ト嫌と
去来
初
同

つぎ安むき返る春

あられと母さへ

あつちの母さへ

あつちの母さへ

あつちの母さへ

あつちの母さへ

あつちの母さへ

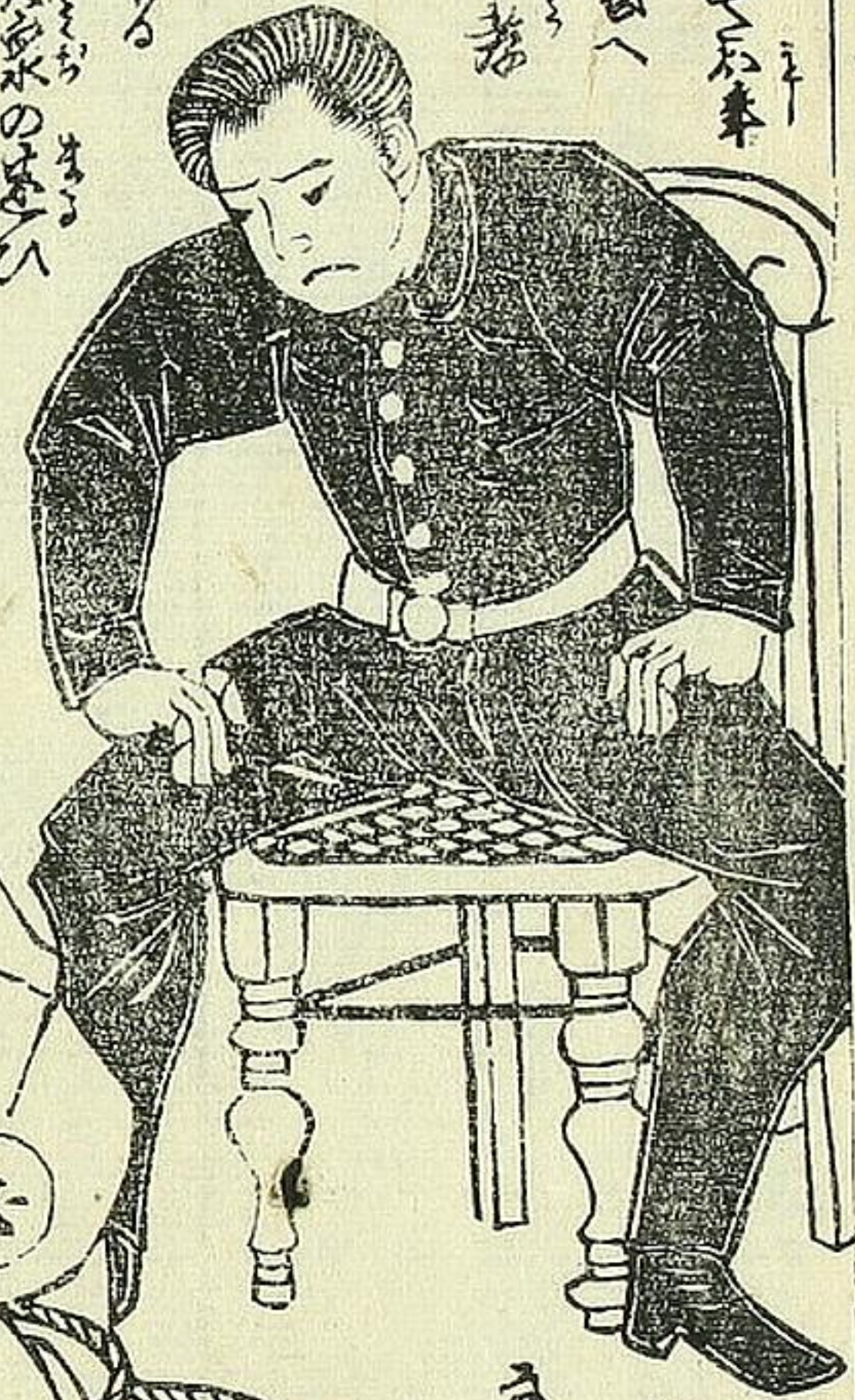
あつちの母さへ

あつちの母さへ

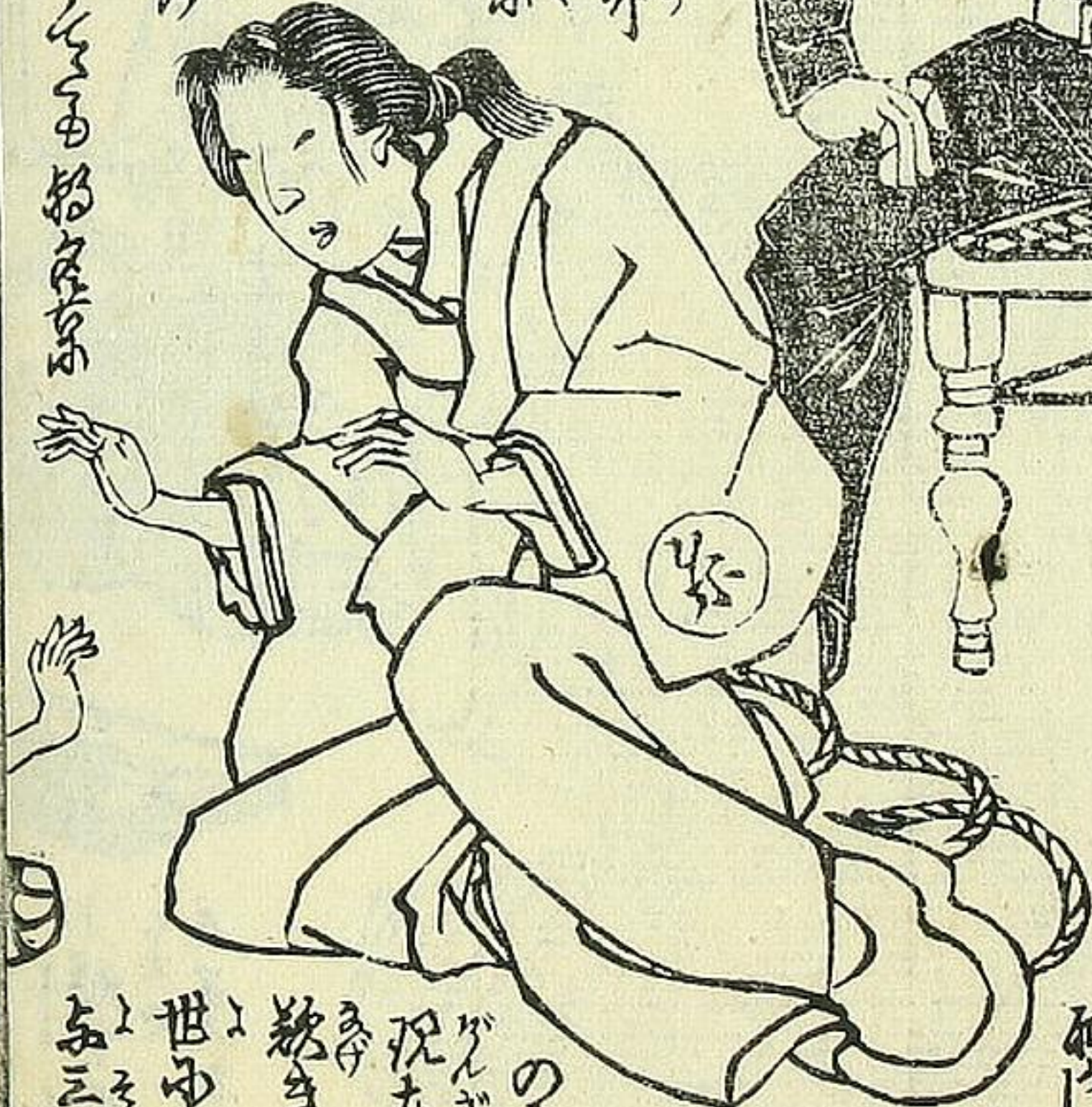
あつちの母さへ

あつちの母さへ

あつちの母さへ



二人の子供は...

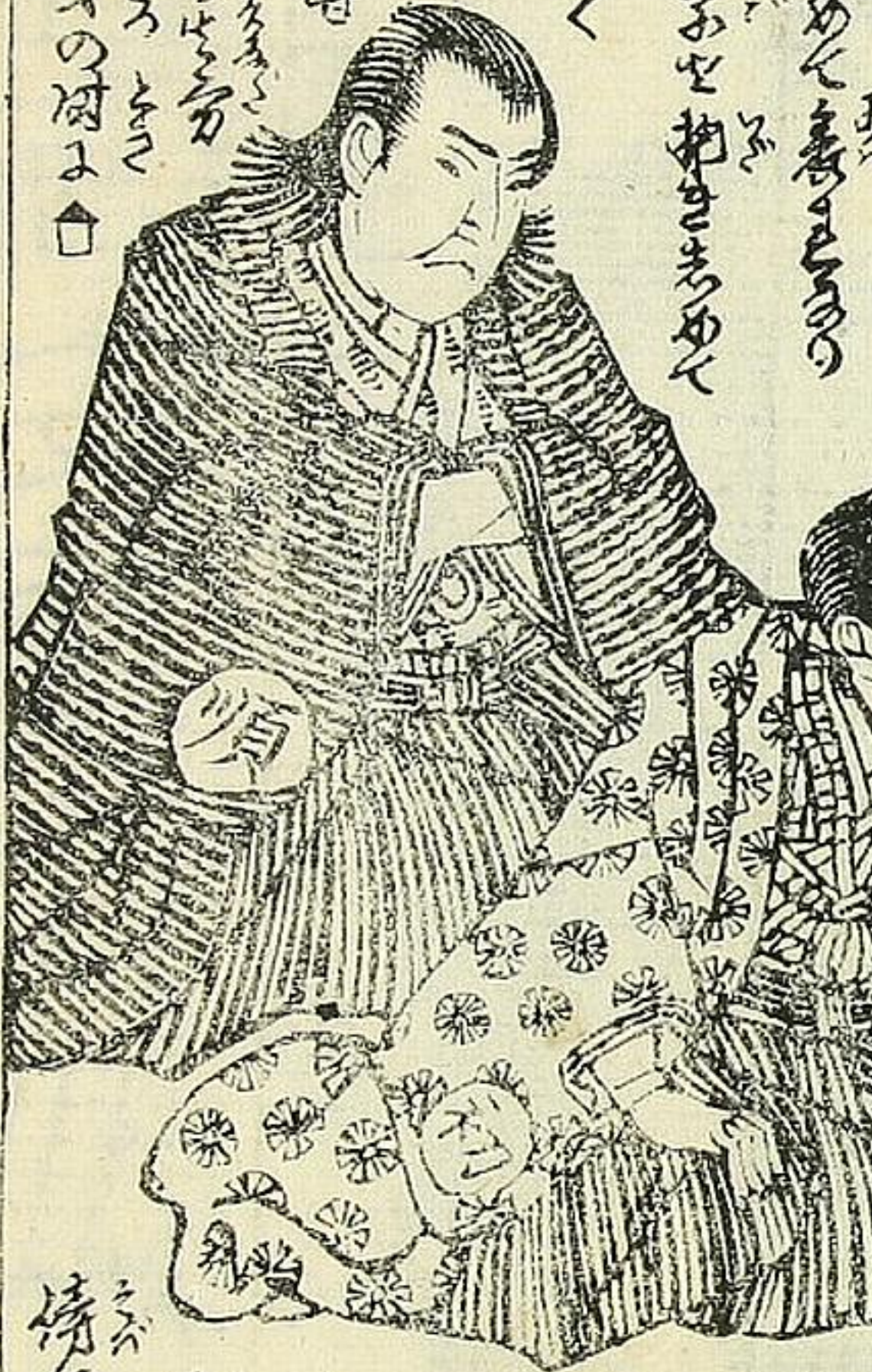


お母さん...

お母さん...



お母さん...



お母さん...



母親の御心
打らぬあひら
色が去幸
の物を丹精
いのが後秘の流ちり
さう方の羨望も
落しつゝやと嬉しやとあつたふ又
母はさういふ乳母のまゝもで

三途の門出馬を親子が世の
さうさやをさうさやかあはれ若生分ハ
女子のすゝめれば伯父入徳の体ぞ
人ともうさ習学問ハ
て世と安楽に

〇種汁やま
他の藝と様出
しと婿人の名を



其長あやせと生女の恥ハ
激登の位長
来ぶさ上小
日毎の拷問
いせうらうら地獄の
羨望のあも死すべし
我命もは身二人や兄長小
甘めく旅一旅病生小あさ
死への形むか叶ひ今日
不付もい對面有者
の浮木小あさ
あはれ
あはれ
ハ叶ひまゝハ

〇順
と三途の門出馬を親子が世の
さうさやをさうさやかあはれ若生分ハ
女子のすゝめれば伯父入徳の体ぞ
人ともうさ習学問ハ
て世と安楽に

生長の後ちかほ遠くへ帝族
の娘放母に似たりと人々小



つぎは河津の縁を止り何の
 あると云い小腰者もく
 進み其のハハの縁を止り
 ひそめ一匹の縁を止り
 旅者も来り人の對顔の苦
 松老も至合中世の祝儀の
 なるか終歎の有さぬもの
 情なく失敬もつねの事
 にはあるれども来り
 の女二日陸路を東多之濱邊
 おあるくの不儀小腰者もく
 祇戸港より汽船にて海とせ
 馬の廻きの濱女三日午後

△二日よりの濱港の帆
 以上密に
 中を
 一長友
 松老の寸志
 ねど今一役用りもあ
 松老の寸志
 ねど今一役用りもあ
 松老の寸志
 ねど今一役用りもあ



中の巻へ
 れをの
 松老の寸志
 ねど今一役用りもあ
 松老の寸志
 ねど今一役用りもあ
 松老の寸志
 ねど今一役用りもあ

梅加賀金澤實記 二冊

嘉永 水滸 國定忠次實傳 六冊

田宮坊太郎一代記 二冊

慶安 正録 由井正雪一代記 二冊

堀部 三度之仇討 二冊

安永 敵討龜山實記 二冊

覆雙言殿下茶店聚 二冊

天明 天保水滸傳 二冊

敵討白石噺 二冊

延享 笹野權二代記 二冊

成田 相撲仇討 二冊

利生 實說朝貞日記 二冊

地本問屋 松延堂 伊勢屋 大西庄之助板

東京日本橋區松島町一番地 水天宮前通り

美加賀 今 常 盤 布 施 譚
美加賀 今 常 盤 布 施 譚

若林行編

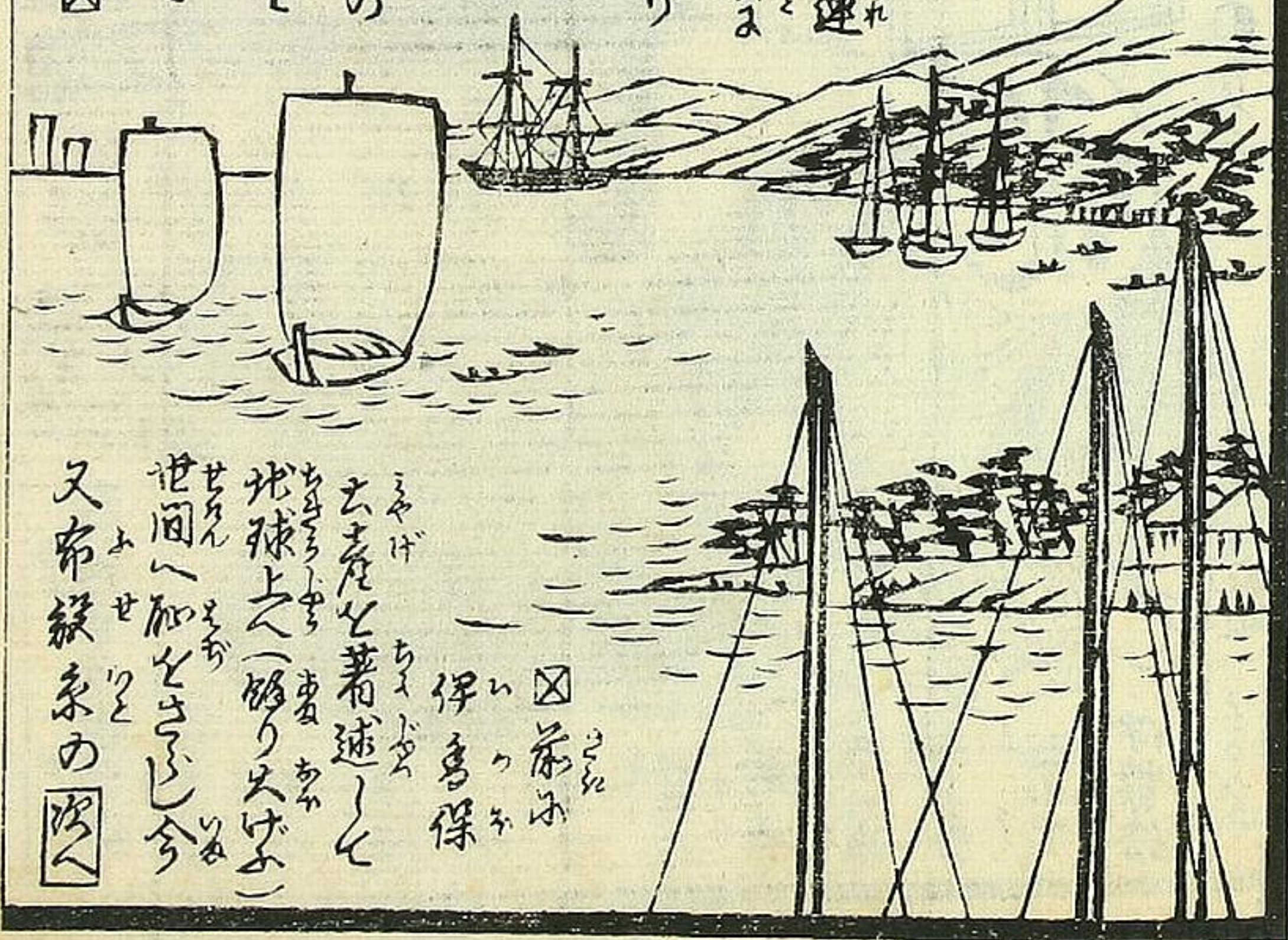


不
三
七

五

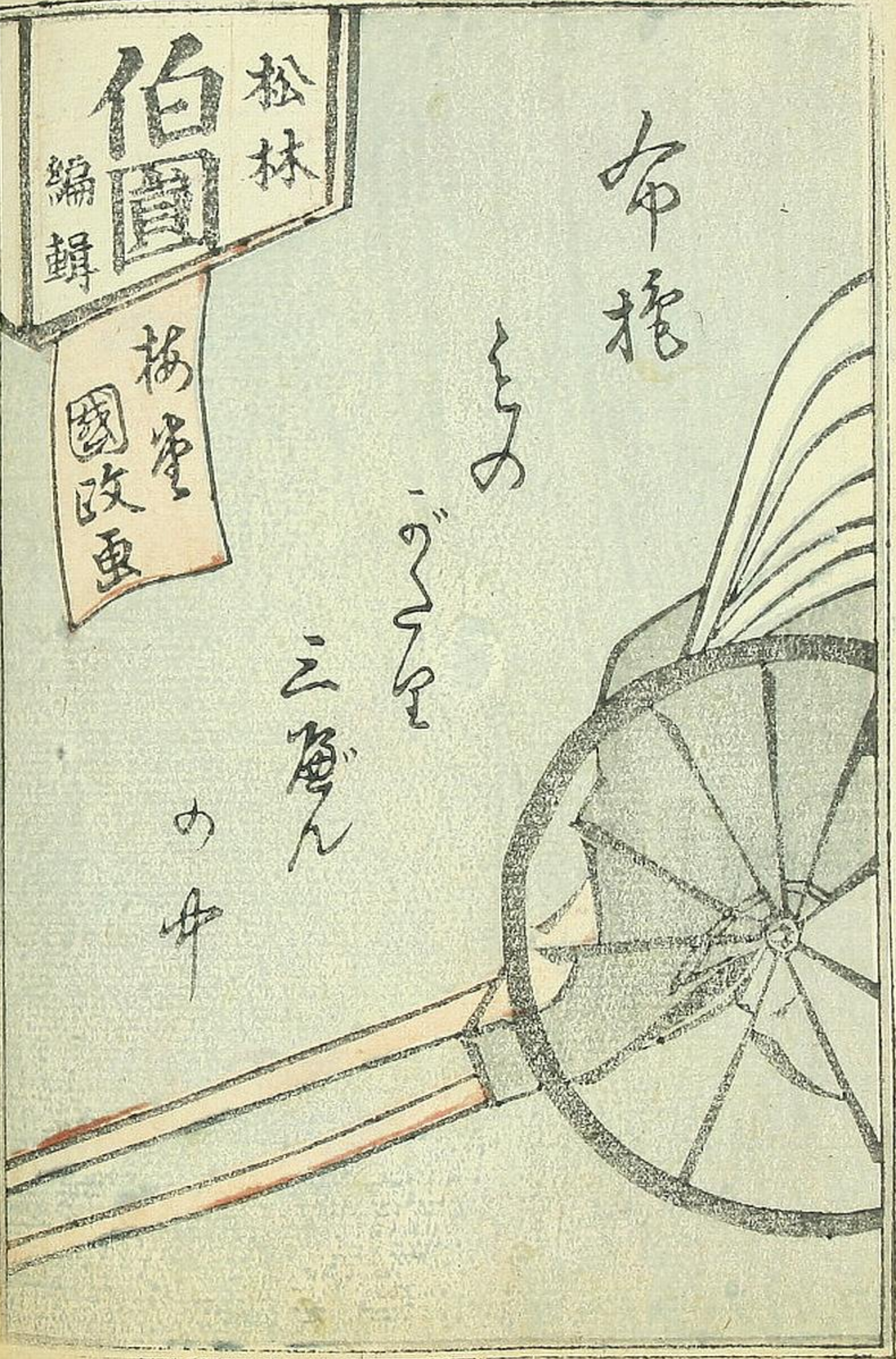
上のつぎ 家集引の足水足舟の海老
 老母の程の始末と物語り終りは痛
 世の中やういと流るる世と老の身は只個の
 先立で消れ入るる世のなかりぬか二日ぬい
 糸田のりまなしく山探りの物語り終りの
 て若千の金と用ははははの金と用はははは

○作者曰帝統系の話一の原出の著者の
 報知新聞より援筆して平本業ある
 濱松新橋渡りての宮に達し願ふ徳恩の
 由るふけいへくは西氏茶室はて是とを
 娘入のふまかふふとを初ち編輯と
 予小曾む己は如何は後面はまりとて



伊予保
 去まはと著述して
 地球上一の語り大は
 世間一知をさし今
 又帝統系の次

百地三



松林
 伯圓
 編輯

梅堂
 國政重

布機

もの

の

三層

の中

つぎ 及びある身も相とけい
兄後せが本枚自舟十二天

七のふやの船と揚げ英
氣と鼓の洋艦も吳公

人の手万望波濤と
ほきまのわあ 和田岬

秋の自國へ航海るは
必小妻子も侍従人もあ

難若も多るぞと
兵庫

是も地球の人ほて
秋の小事ハ物数もい

と開けゆく代わゆく氣の
進みのをるゆりり 開石

淡路



↑ 嶽登小浪東

かき付に

拷問まで

教養も

及び一と

あむが秋

密むはみ

事うり

兵人の傍

文子あ

○ ぶらる

足柄の

山姥

操る

山のつち

穿み

若痛

せ

本番

由板

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

第十二回 ねむ布張糸

明治五年一月廿六日小横濱

港へ忌船出日午後小慈乳

道船あて安吏浦津東多入

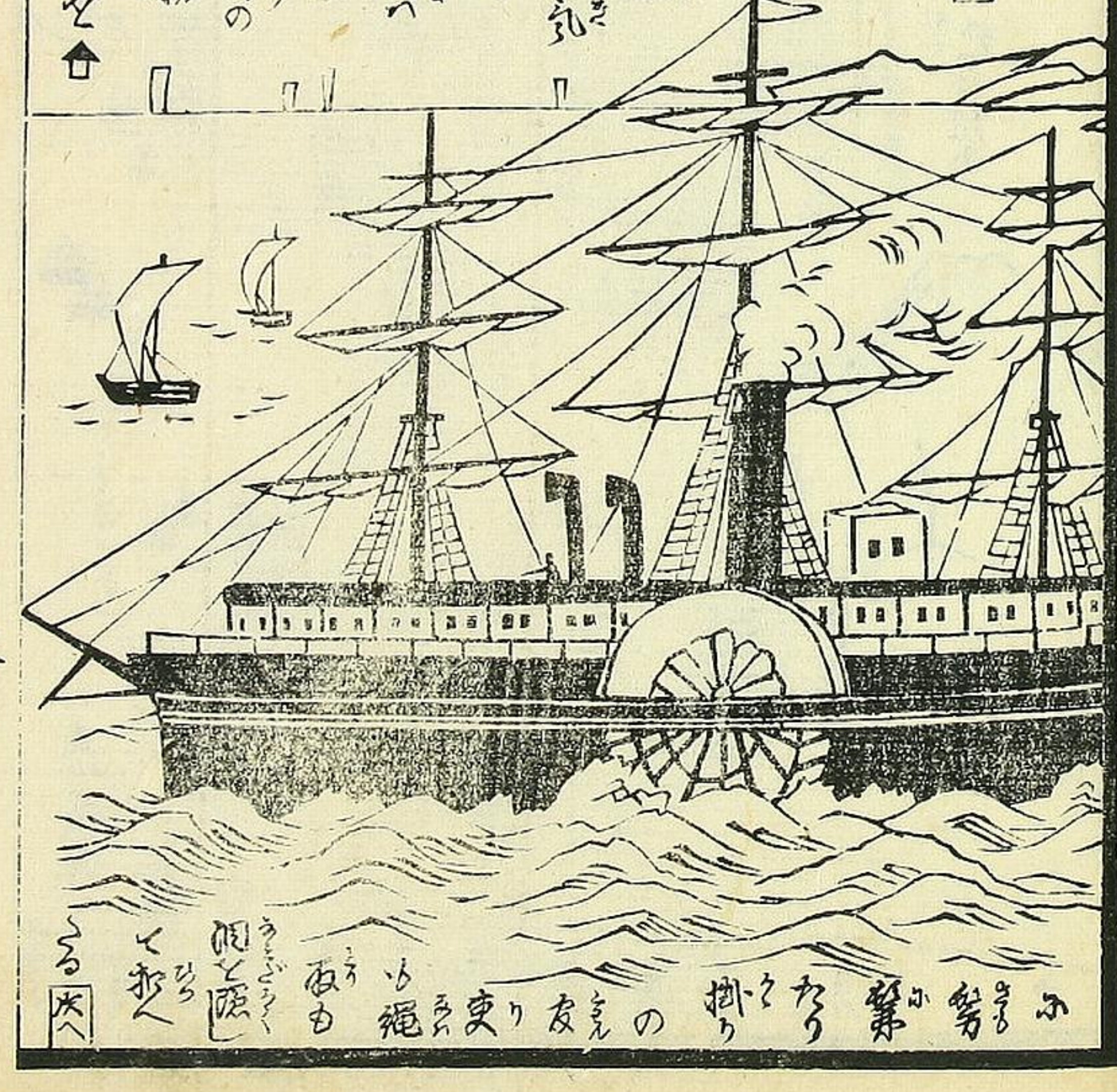
護送ととを成りけりる前初ハ

致意分と局の艦船もあめ

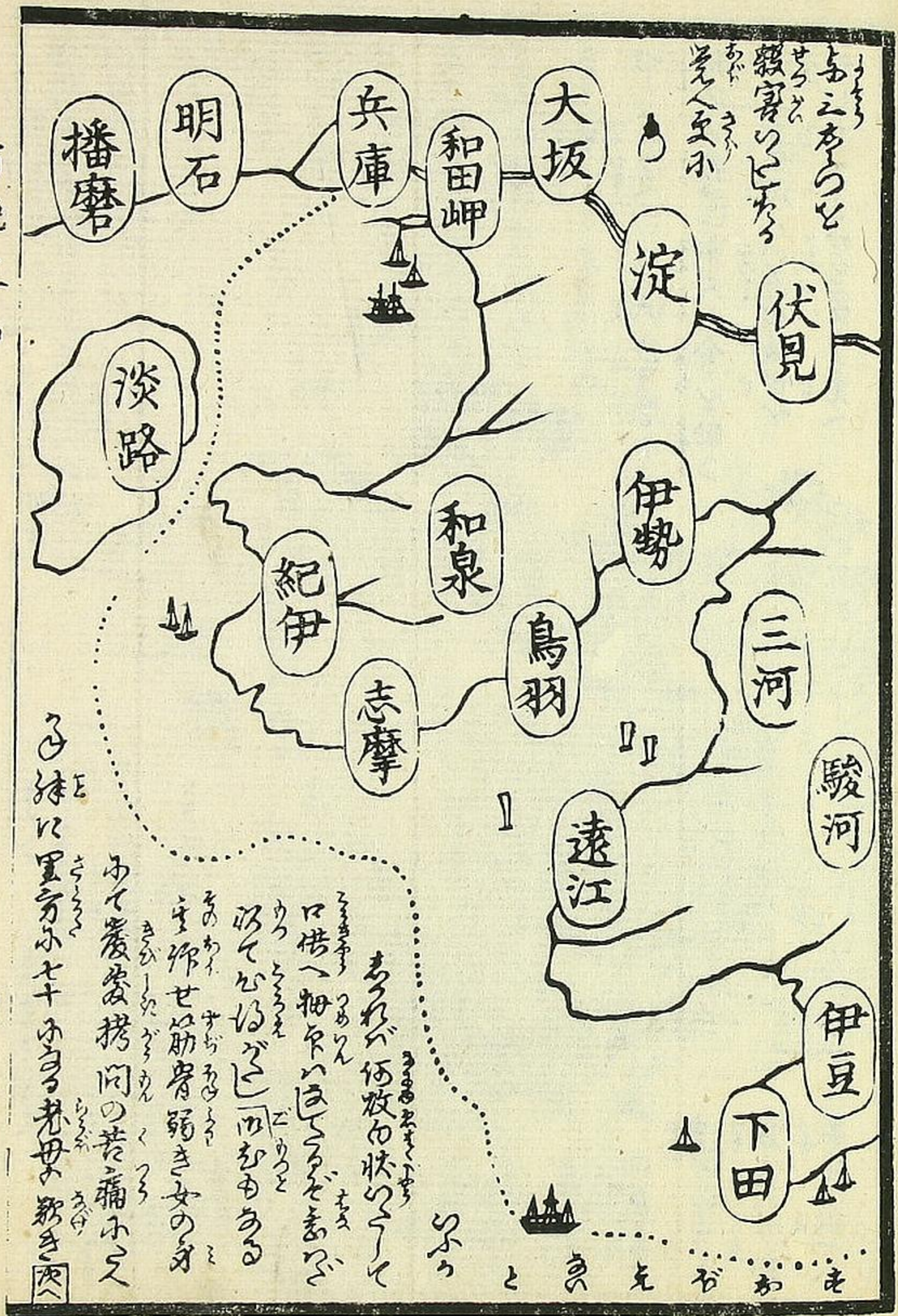
主是二月二日初めく司法省の

於義とあり西名上等裁判

所へ引出さる小永き月日と



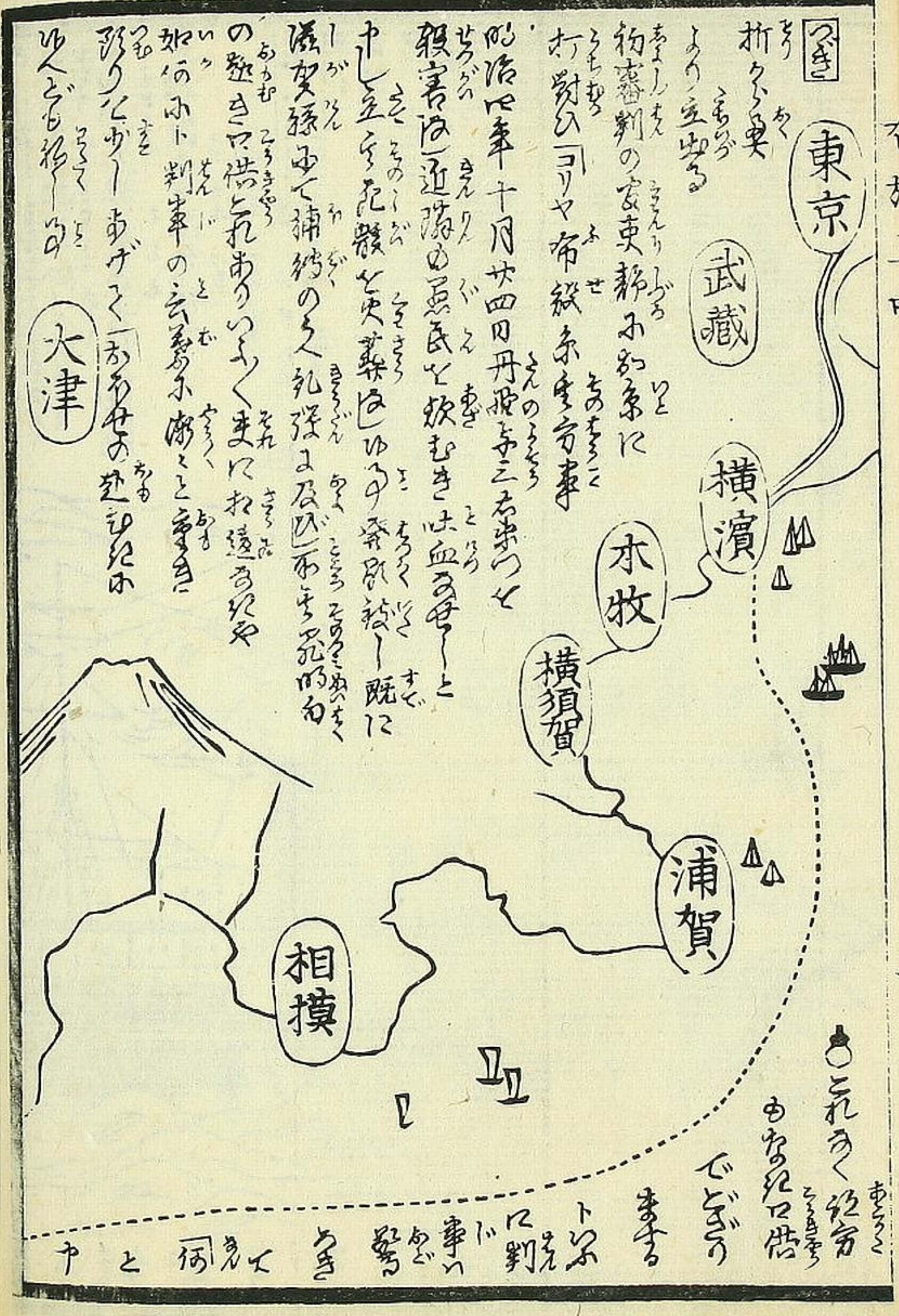
あ ねむ布張糸の掛り 繁 勢 小 船 出 港 へ 忌 船 出 日 後 午 小 慈 乳 道 船 安 吏 浦 津 東 多 入 護 送 と と を 成 り け り る 前 初 ハ 致 意 分 と 局 の 艦 船 も あ め 主 是 二 月 二 日 初 め く 司 法 省 の 於 義 と あり 西 名 上 等 裁 判 所 へ 引 出 さ る 小 永 き 月 日 と



市地三

日

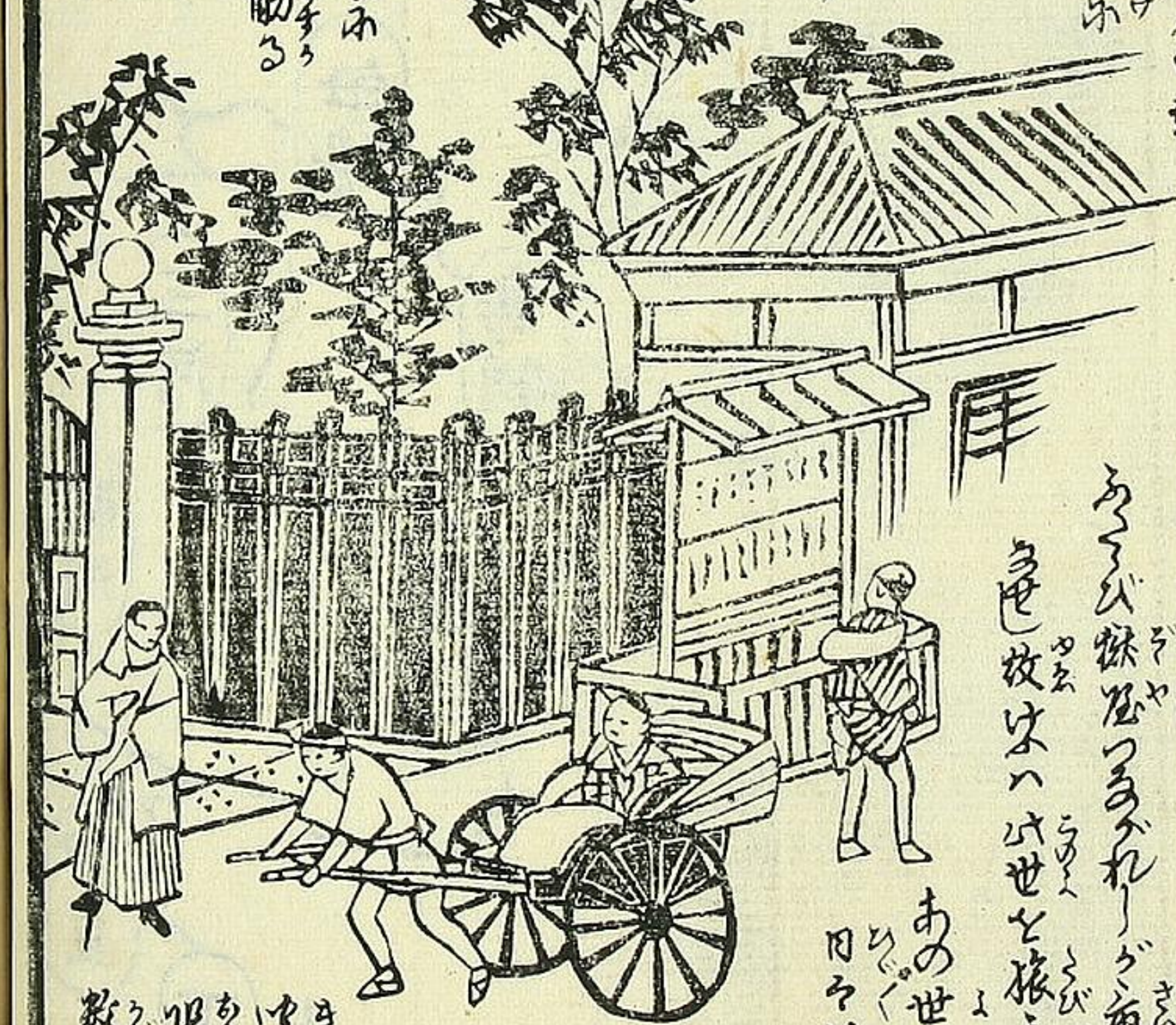
子妹に里方ふ七十小者老母新き
 ありて何故の状のうて
 口惜し相下はほくをまひ
 以て心はぐに四むある
 主作せは助骨弱き女の身
 ありてはたかき
 ありて後後拷問の苦痛小
 とま先おおま



折く果
 よりの生ゆる
 物審判の安東稀ふ糸に
 打射ひソリヤ布級糸生方奉
 明治四年十月廿四日丹波寺三志宗の
 殺害は近隣の農民と被むきは血を奪うと
 申し立てを死骸と失物集はゆり審判既
 議定孫由て捕縛の久礼強及及以不き死の
 の懸さ口供とれありゆりまにね遠る如
 如のふト判事の云ふ事不測と云ふ
 路り少一あがくあり舟の近は
 大津

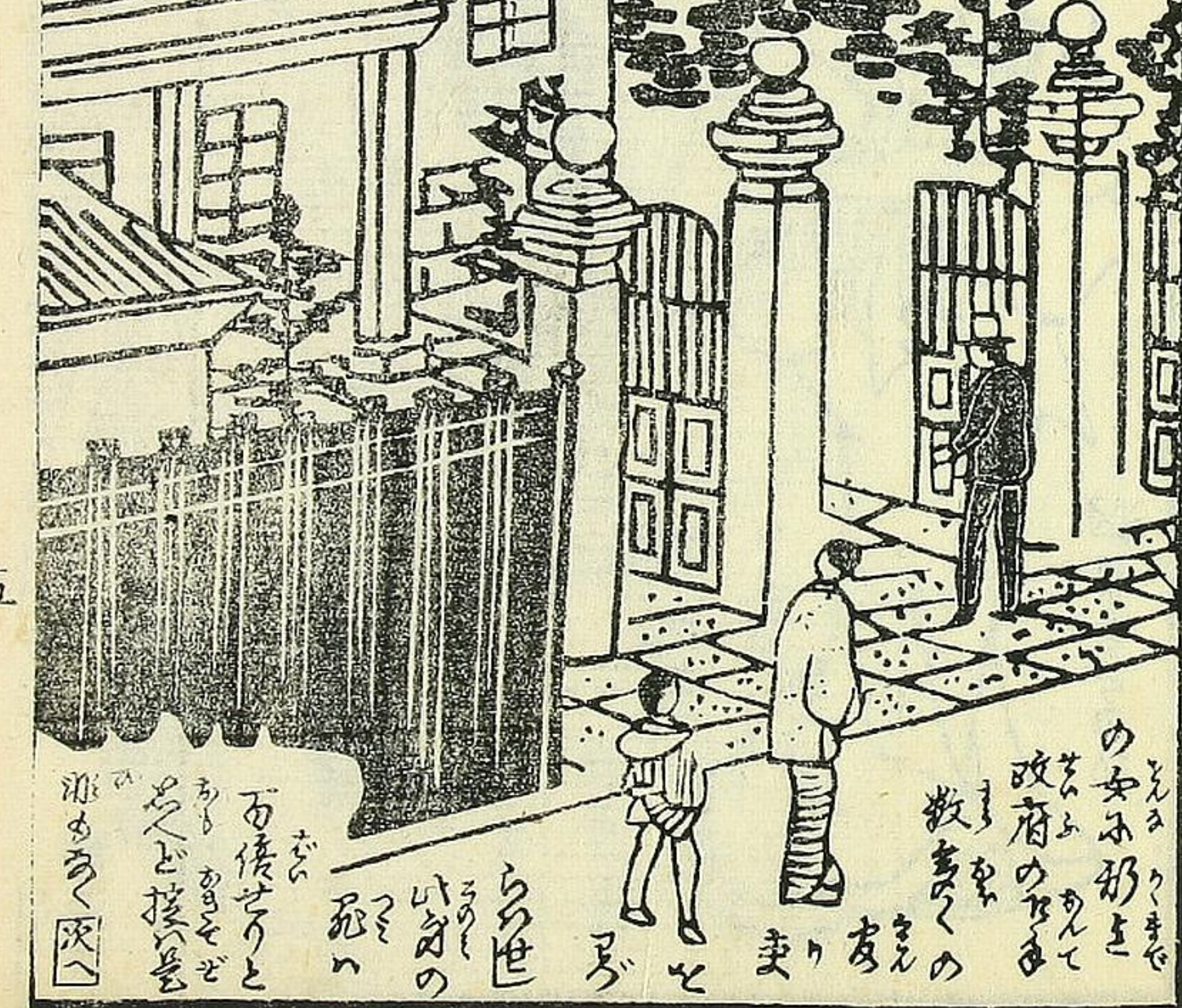
〇これより後
 由なる口供
 七と
 ます
 小
 判
 事
 の
 事
 中
 と
 何
 事
 中

長男初を身送め二人の娘
 松が寛政を望むと林松の
 許嫁の心魂をうつす
 刺若あすは世に存る故
 まうわうく死人と多様
 身ハ刑場の衆と情
 六六若先經き母親や
 二人の子供の好む
 けうを主とまきうめ
 つくは必死三つあひつゆ
 丹波を救世 和人の命を助る
 若世の長根へは身の後世を
 形も通ると心を愛し人

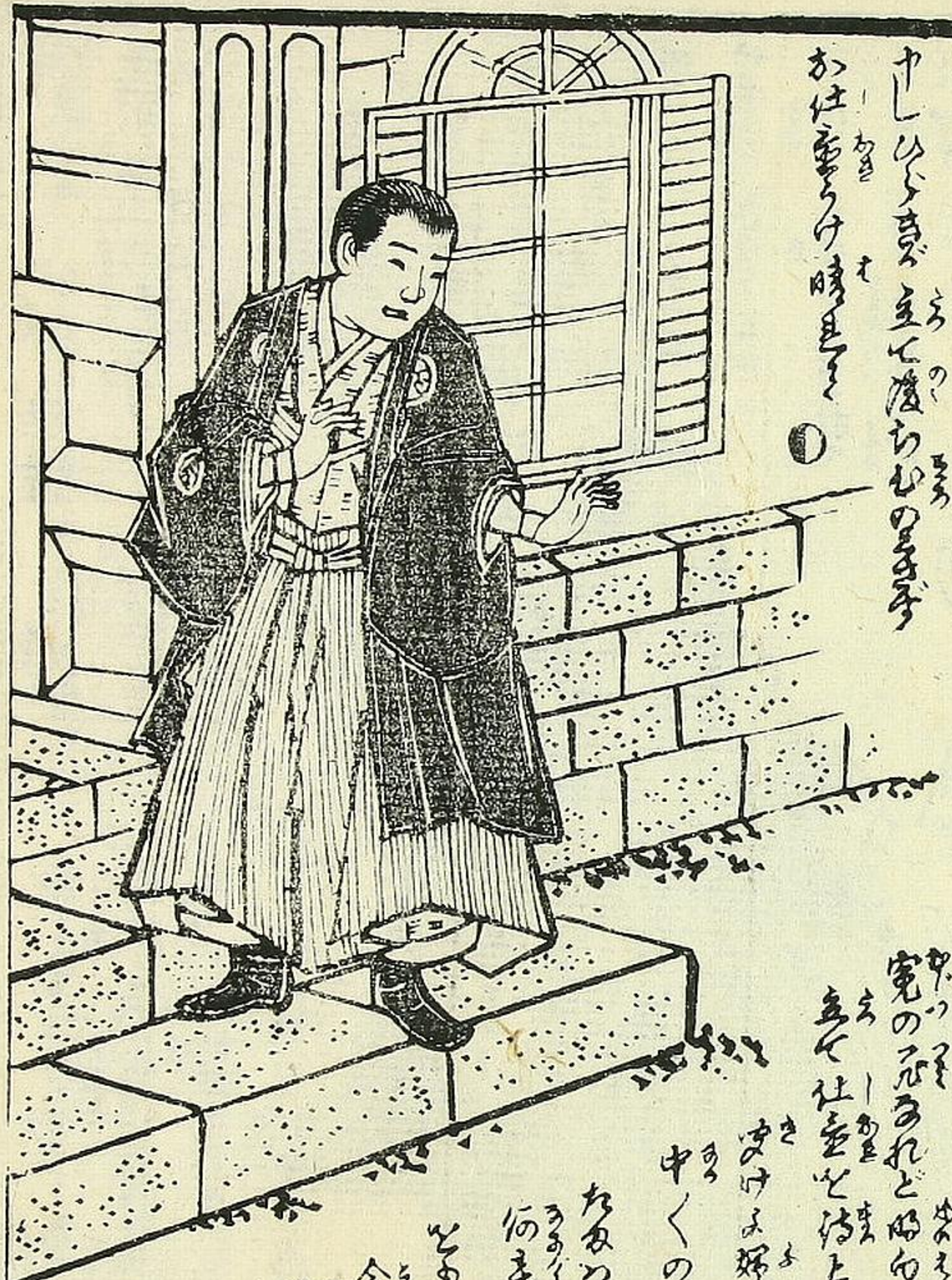


あの方の死に情と心を
 あくは縁をつまねれが
 色故はへ世を旅立つ
 あの世へ赴く
 日や情とを
 法
 本縁子
 判決
 子
 以
 思入りの物
 教ある人

あは死に伏し一田もすく死を
 袖一は身とが何ゆゑまき
 身止さばし縁令松田との
 情深く和人の命を助る
 の苦痛不慮へは身の後世を
 まうわうく死人と多様
 あくは縁をつまねれが
 初めは
 死に伏し
 一旦死
 伏せ



あは死に伏し一田もすく死を
 袖一は身とが何ゆゑまき
 身止さばし縁令松田との
 情深く和人の命を助る
 の苦痛不慮へは身の後世を
 まうわうく死人と多様
 あくは縁をつまねれが
 初めは
 死に伏し
 一旦死
 伏せ

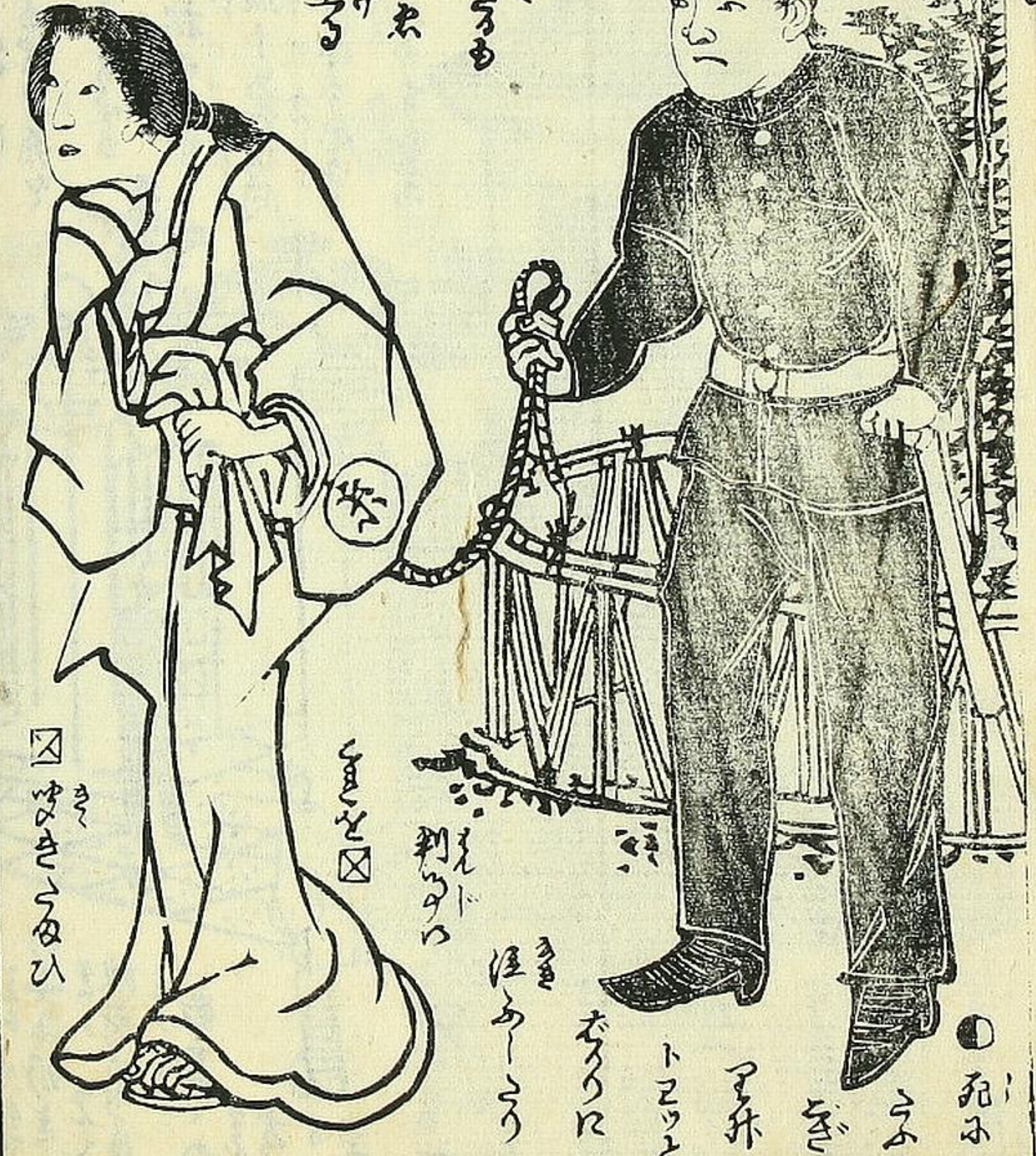


物とらめめと第一發寛の宛の
ヤシひらきまをまて渡ちむのまき
おはきうけ時且々

新色三

只今ま方の中をわろく合合
寛の元とれと船の江中しひと
まを社をと持とやまがコレ
まけよ婦人あうまはま
中くの女子結水
ちぬれぬぬ古ま
何れかまき後白
まゆつとぬと
今日むとの
知と知は
仕業は成と
中をたれ
がある

海路と
越へく
東の糸商
裁判所の西利と
あり今日け所へ物をも
飛極まりしめ舟も
庭と解く道



死小
ア升
トコツと
たりのに
ほふ一うり
判り
中
中
中

新色三



りんごの板
 布絶の姿
 産地ゆかり
 めを模倣する
 酒舎の
 名代身
 自らつくればと
 新し掛巻の
 あるよろしと
 系が彼とが殺害
 甘しふいあがさるうと◎

市巻三中



つまのいよく 無罪と事極まれば杖角と
 ありと白田晴天と名生方の外のと
 実小縁令松田氏の中さる如く理社
 的白ありされば良政府の本意に
 あらば令く名人と申すに性かぬ
 徳地あらばまじりに無解のを
 かるるばを重なるを
 老候まじり今一發
 始め心そのと上申
 せんまらるうと
 下通りおまきさるるれて
 介さるまを 先東丹波が
 暴れり人由新うら

◎うらふかかると 物多んが
 これ大いなる得りみと女あがらも
 以東が生て世はあたらちの紙一枚
 めで由担暴の丹波ふんへ

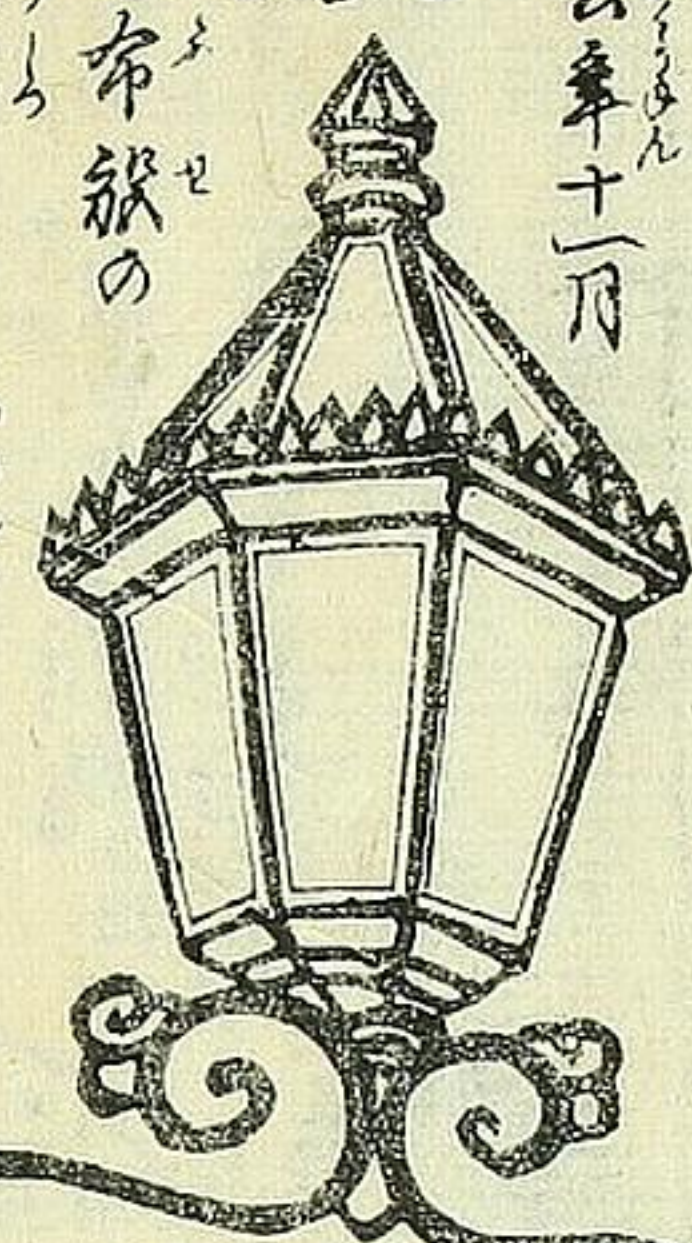
市巻三中

大開 天一坊物語三冊 筑紫河柏崎文庫二冊
 大開 越後傳古物語二冊 岩見重太郎實傳二冊
 大石内藏助一代記四冊 白井權八實錄話二冊
 佐倉宗吾實傳二冊 假名手本忠臣藏二冊
 柳沢女大平記實錄二冊 伊賀越仇討實譚二冊
 小栗判官一代實記四冊 佐野殿十郎實錄二冊
 言水二刀傳實說二冊 伊達對決實記二冊

大開 天一坊物語三冊
 大開 越後傳古物語二冊
 大石内藏助一代記四冊
 佐倉宗吾實傳二冊
 柳沢女大平記實錄二冊
 小栗判官一代實記四冊
 言水二刀傳實說二冊

大開 天一坊物語三冊
 大開 越後傳古物語二冊
 大石内藏助一代記四冊
 佐倉宗吾實傳二冊
 柳沢女大平記實錄二冊
 小栗判官一代實記四冊
 言水二刀傳實說二冊

大開 天一坊物語三冊
 大開 越後傳古物語二冊
 大石内藏助一代記四冊
 佐倉宗吾實傳二冊
 柳沢女大平記實錄二冊
 小栗判官一代實記四冊
 言水二刀傳實說二冊



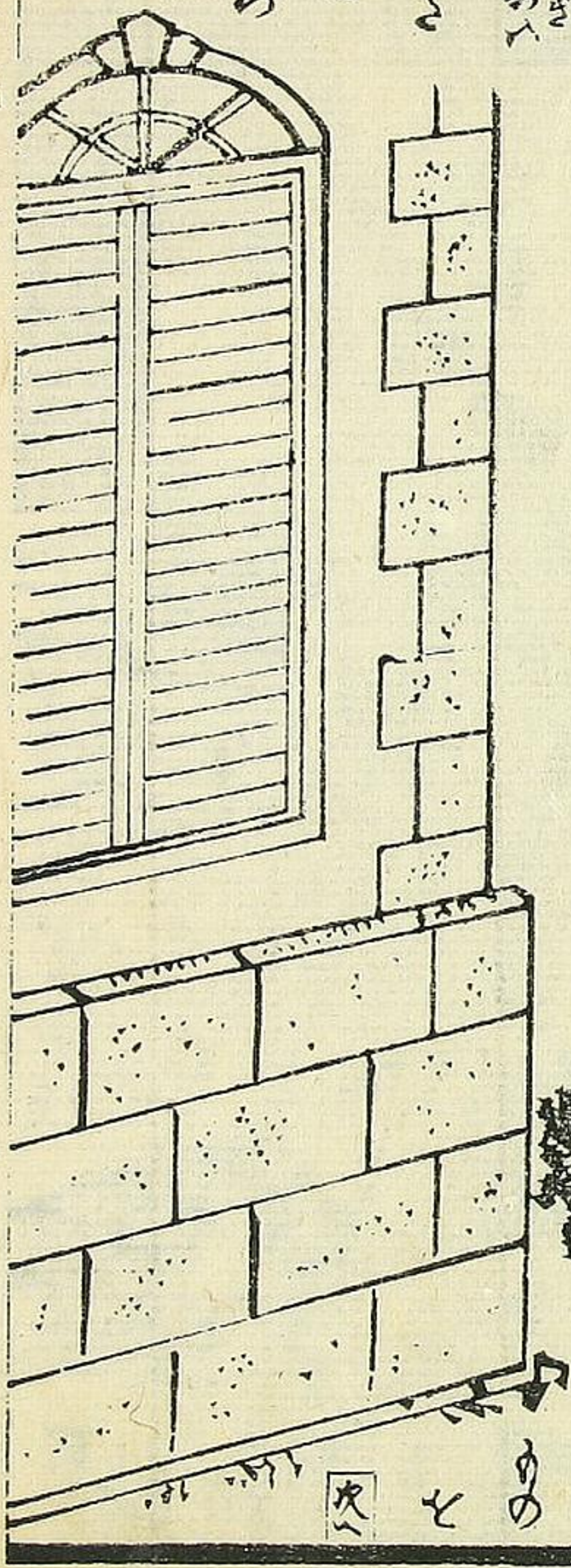
の 始 末 後宝より大小
 買寄られた初代金の
 三四ト七十五筋扱人の帳ハ○

○此通り外子 纏刀を愛し
 一層まひくく羨
 十有餘名判筆友
 好むくに尋問
 されどおしも証係
 上かねハ 下の巻ハ



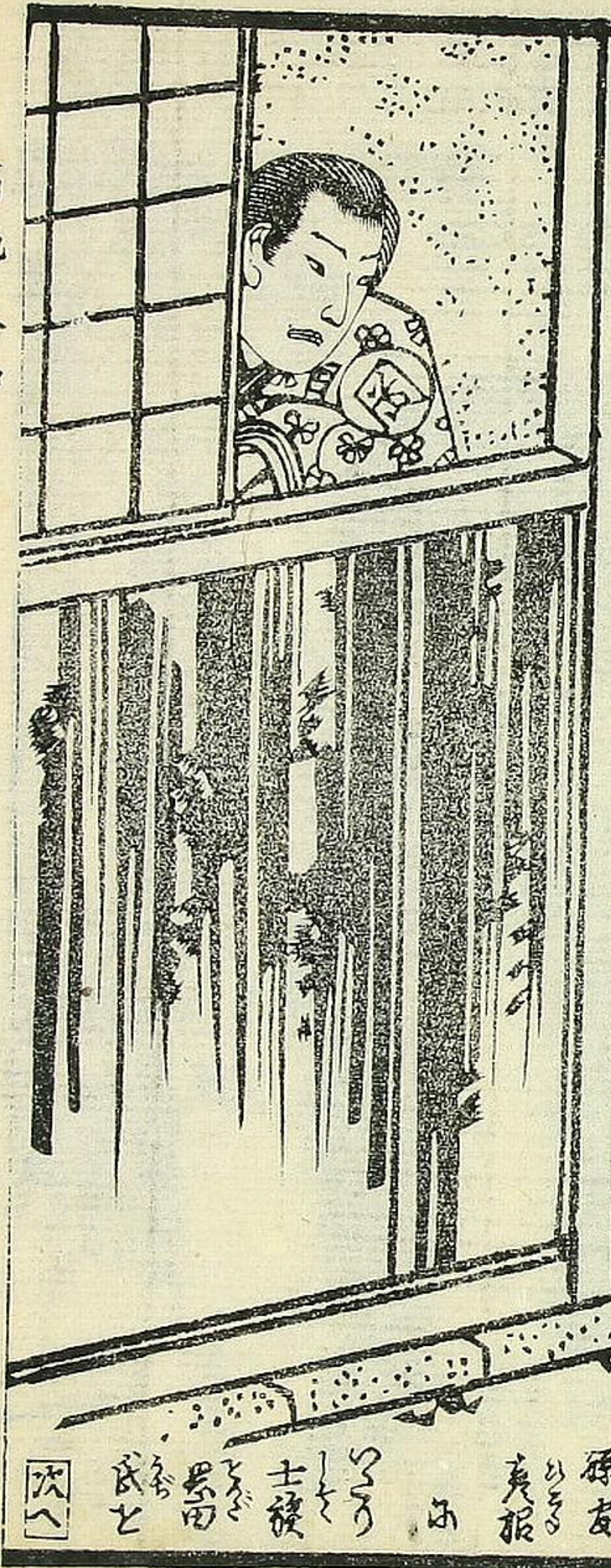
原田道義編纂
 小學開化用文證
 習字
 青木東園書全
 原田道義編纂
 東京日本橋區
 入形町通杉島町
 壹番地水天宮前
 地
 伊曾屋大西庄之助
 必要
 文學
 助字解
 解
 水
 地
 伊曾屋大西庄之助

中の巻より 一名の法衣はつぎの巻の 墨流すもむすあしや 〇 後口ハ幸以
 今味のみ末に向ひ 別今尋問きん 以後の快給されしと里七 不持しと居る
 此の巻にありし 昔士族の事ゆゑ かつ由世まゝのみ 昔の先年 〇 越後の婦
 婦入りせ 昔士族の事ゆゑ かつ由世まゝのみ 昔の先年 〇 越後の婦
 室酒のり刀の両持世よりん 一風船の巻もさう 本年十四 〇 墨流すもむすあしや
 布袂家の両方お面個への 附てさう竹竿の如く 墨流すもむすあしや 〇 越後の婦
 昔の巻刀持一切等之むしし 墨流すもむすあしや 〇 越後の婦
 ありあへ 〇 越後の婦
 如何いそ 〇 越後の婦
 甘んて 〇 越後の婦
 赤三つら 〇 越後の婦
 七四者 〇 越後の婦
 色玉 〇 越後の婦



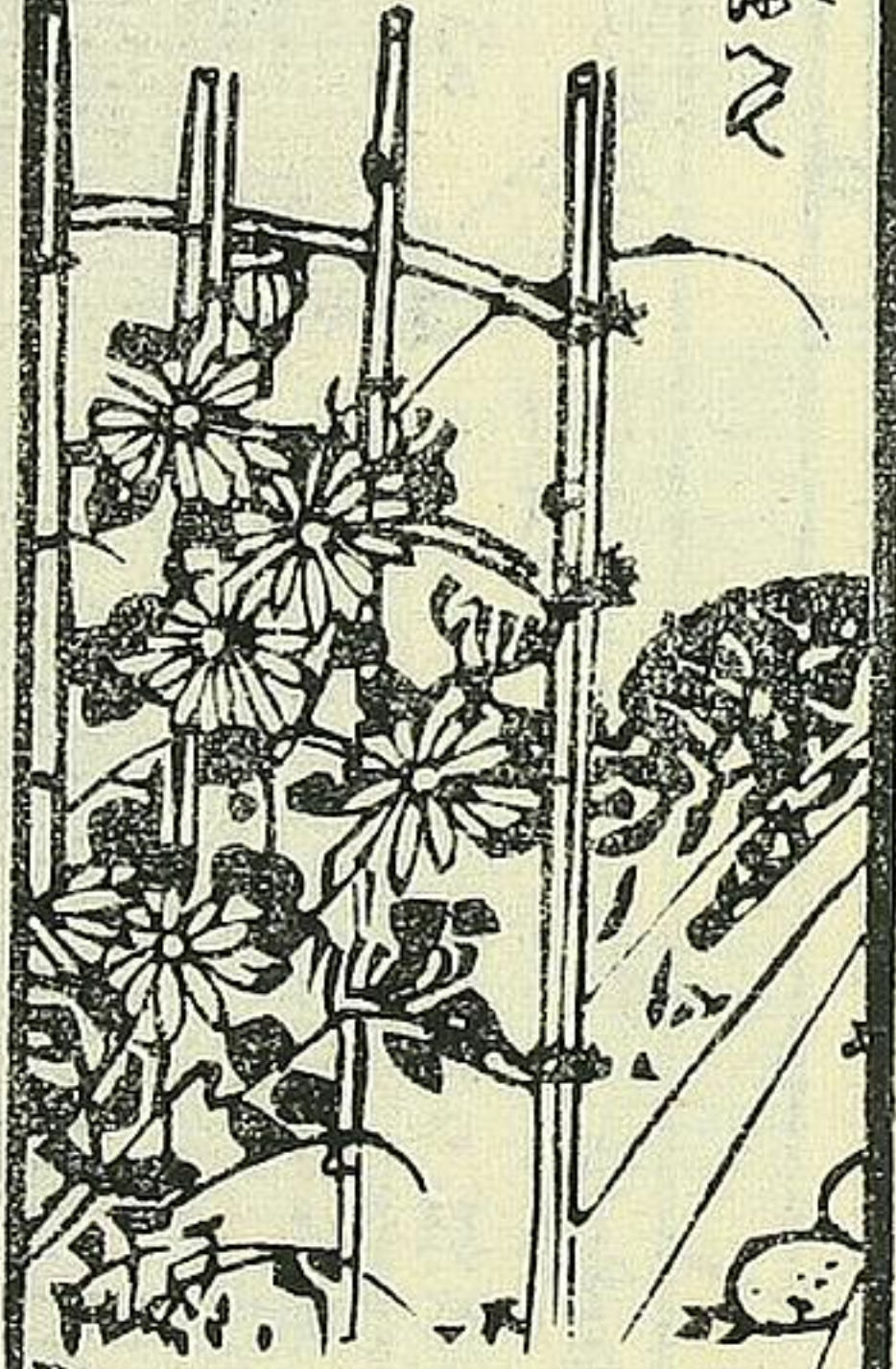
今
 松延巻
 三層ん
 の一
 擇

本巻物五口



三才の
 五奉八月
 の事※

乃々大切の身は海へ
 舟りませり志の
 乃々お酒あふ
 種由のいなり
 ますしと清き



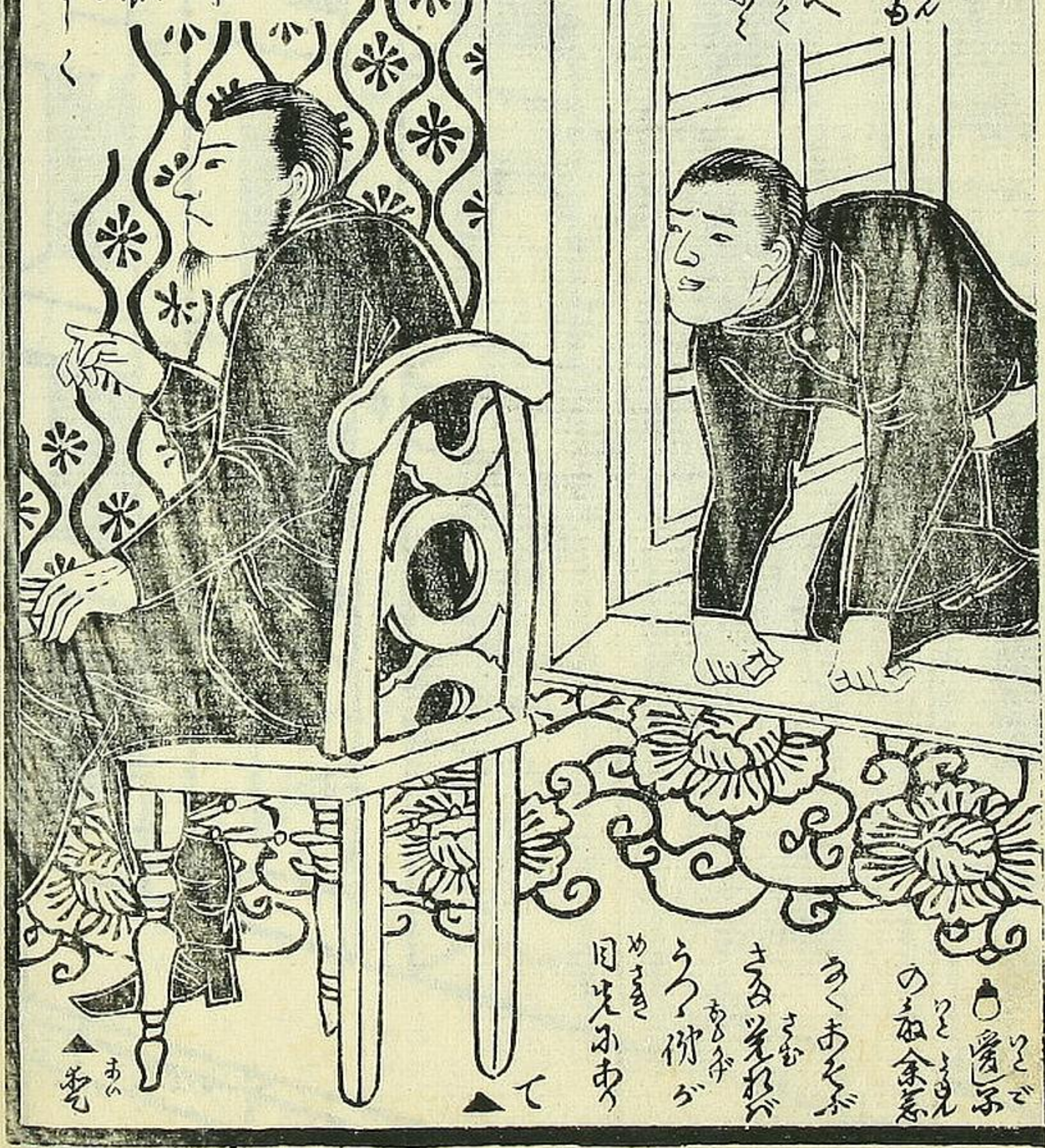
大八
 氏七
 士候
 孫友
 美振



十月
 種刀の一奉
 若殿左の箱
 のお持あふ今

小
 照會
 橋一
 遊聖
 家方
 小法
 玄葉

天晴の女太夫は法衣も
 走らば指問と止む獄へ
 送つてゐるさうさ
 口供もお淋く日あつ
 大和判の何をまつ
 物も小長衣二管判
 本某思ふうゆ法
 してあるも冷飯の
 青あれば刑へ替く
 兄合せよと誓くお糸
 心ぬ抱きせはる獄
 危ふ永き年月空しく



〇遺子
 のお余志
 きくあをふ
 さるさる
 うつゆが
 目見あふ



清光はこれとて後河の事をも
 うらぐくと一室お立敷くこやゆ
 七女以書其の母の
 三人の子供のあつ
 仍のいそいそ
 へはやくして後子
 八弟の五才乳對
 の味も中くふ
 七女に兼たる
 初子の今に
 如何にそ
 やらんと眠こ
 ば差ふ

判
 不胸の長
 の端
 務る
 細の面
 向ひて福玄図



下三

拾遺

第十四回

馬頭觀世菩薩

順

此由家より西の方へ去る
 夏は越えしうらやまの
 山も何年か
 水は色を
 影ひまふと
 あふと合せしは舞ひあはれ
 五月の月
 馬頭観世菩薩
 拾遺



起し一止
 形なるを
 心又ゆつと
 ぎえ違
 ひるへ
 死行く
 先の勝敗
 の勝り運も
 死にのめられぬ
 命のうしろま
 生あるへく憂目と
 くる旅区あめりけりしとせは

岡

初

〇 檀会小回より先法と
 送る程今
 年へ時
 子九年と
 五月の月止
 〇



速情の擧げ
お返しの中し為長友へお返し

あつて不審の筋とあねがきろと無致
後一申し為長友へお返し

あつて不審の筋とあねがきろと無致
後一申し為長友へお返し
あつて不審の筋とあねがきろと無致
後一申し為長友へお返し



あつて不審の筋とあねがきろと無致
後一申し為長友へお返し

あつて不審の筋とあねがきろと無致
後一申し為長友へお返し



あつて不審の筋とあねがきろと無致
後一申し為長友へお返し

